

それではヨハネの福音書 8 章 41 節の続きを見て参りたいと思います。『あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っています。』彼らは言った。「私たちは不品行によって生まれた者ではありません。私たちにはひとりの父、神があります。』今日は 41 節の残りの部分「私たちにはひとりの父、神があります。」と、この部分を残しておきましたので、そこから始めて行きたいと思いますが、これはユダヤ人たちの信仰告白と言っても良いと思います。「ひとりの父、神がある」と。神様は唯一の神であり、また父なるお方であるというユダヤ人たちの信仰告白であります。この信仰告白は恐らく申命記 6 章 4～9 節、そこはシエマの朗誦として有名な箇所です。“シエマ”というのはヘブル語で「聞きなさい」という意味ですけれども、「聞きなさい」という言葉においてユダヤ人たちが朝と夕方の礼拝に毎日唱える箇所であります。『⁴聞きなさい。(これが“シエマ”です。)イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。⁵心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。⁶私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。⁷これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。⁸これをしるしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい。⁹これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。』と、これはまさにユダヤ人たちの信仰の中心点というわけなんですけれども、このような信仰告白、唯一神信仰というものを表明しているわけなんですけれども「主なる神様は数ある神々の中の 1 人でもなく、また神々の中の最高神でもなく、ただ 1 人の神である。」という告白であるわけなんです。イエスも神のことを“父”とお呼びになり、そしてご自身を神と同等に見なしておりました。「わたしはある。」という“I am who I am.”といった宣言をされる。これは“ヤーウエ”という神様の個人名でありますけれども。ですからイエスは「私はヤーウエである。私は主である。」というふうに事実上の神宣言をこれまでしてきたわけなんですけれども、そうしますとここで読みましたシエマの朗誦にあるユダヤ人たちの唯一神信仰の告白に抵触するわけです。「神は唯お一人であって、神は 2 人はいない。」と。ですからイエスは「父と子それぞれは神であって、同等である。」というそのような宣言をされていますから、ユダヤ人たちからしたら自分たちの正統な信仰にこれは抵触するんだと。神様が 2 人というのであれば、それは多神教ではないかと。ですからユダヤ人たちは「私たちは不品行によって生まれた者ではない。」というふうに付け加えたわけです。つまり霊的不品行を行うような偶像礼拝者ではないと、ユダヤ人たちはイエスに対して宣言したわけなんです。この時点でようやくユダヤ人たちはイエスが肉の子孫のことを言っているのではない。アブラハムの子孫のことを言っているのではなくて、霊的子孫(アブラハムの子どもというのは霊的子孫のことを指す言葉とイエスは使用していますけれども、むしろ彼らのその信仰の対象、そのルーツというのは神様ご自身であるのですけれども。)ですからようやくユダヤ人たちは自分たちの霊的父は唯一神であるというふうに信仰告白をするに至っていくわけですが、イエスはまさにこの彼らの発言というものを今引き出したかったのです。アブラハムが人を救うのではなくて、神様が人を救うんだと。

しかし、残念ながら彼らのその神観また信仰観というものは間違っておりました。ですからイエスのこの神観とは真っ向から対立するようになるんですけれども。しかし、彼らのユダヤ人たちの神観というものは、このシエマの朗誦という御言葉に基づいたのではないかと皆さん思われると思うんです。確かにこの御言葉に基づくというのがここでのミソなんです、問題点なんです。一見御言葉に基づいている正統な信仰告白のように思えるんです。でもそれは一見というだけで、よく読んでみると実は彼らの信仰告白というものは間違った神観に立つものであるということに気がきます。

このような彼らの間違った信仰告白、また間違った神観に対してイエスが次のように応答します。その応答に注目したいのですが、ヨハネ 8 章 42 節をお読みします。『⁴²イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。なぜなら、わたしは神から出て来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。』と、ここで「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを

愛するはずです。なぜなら、わたしは神から出て来てここにいますからです。」と。イエスは「神から出て来た者だ」というふうに宣言されました。これも事実上の神宣言です。誰も神から出てくるという事はありません。ですから「神から出て来た」というこのついつい読み過ぎてしまう一言は、これはイエスが神であるということの宣言です。そして神が私を遣わしたと。これは、元々神である方が地上に遣わされていくという意味で、神が人となった、受肉した神、メシヤであるということの宣言でもあります。ですから単純なこの「神から出て来た」という言葉、また「神が私を遣わした」という言葉、これはすべてイエスが神であり、また神が人となった受肉した神、救い主、メシヤであるということの宣言なのです。実はこのイエスの宣言は、やはり全て御言葉に基づく宣言でもあるわけです。例えば創世記3章15節、ここに有名な原福音という福音の最初と呼ばれる言葉があるんですけども、『わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫(蛇の子孫)と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。』とあります。ここで“女の子孫”と呼ばれる者は、これは文字通りは勿論エバの子孫になるんですが、ここでは単数形が使われています。ですからエバから始まる沢山の子孫たちという意味ではなくて、1人の子孫。ですから“彼”というふうに表現されています。またこの“子孫”というのは実は「女の精子」というふうにも読み替えることが出来ます。「女の精子」というものは勿論あり得ない話です。すなわちこれは、男に依らない子どものことを言います。別の言い方で言えば“処女降誕”ということが、この言葉から連想出来るわけです。男に依らない子供は、処女から生まれた子どもであるというわけです。それが蛇の子孫の頭を踏み砕くと。“蛇の子孫”というのは、これはサタンのことを言いますので、サタンの頭を踏み砕くところのメシヤということになります。この女の子孫、処女から生まれる者こそが、実はメシヤであるということの宣言です。

ここでイザヤ7章14節をお開き頂きたいと思えます。『¹⁴それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。¹⁵この子は、悪を退け、善を選ぶことを知るところまで、凝乳と蜂蜜を食べる。』とありますけれども、ここで“一つのしるし”とあります。これはメシヤとしてのしるしです。メシヤとしてのしるしは、処女から生まれるというしるしであると。これが「インマヌエル」と、「神は私たちと共にいる」という名前を名付けられますが、これがしかも“男の子”だと言われています。女の子孫であれば女の子という可能性もありますが、はっきり“男の子”と言われておりまして、名前も「インマヌエル」と。勿論このようなしるしを持って生まれた方は、ただ1人イエス・キリストだということを皆さんもご存じです。処女マリヤから生まれて、そして「インマヌエル」と名付けられたお方。これはナザレのイエスの他にはいないわけです。

そしてイザヤ9章6節もお読みします。『⁶ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。⁷その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。』ここに、ひとりのみどりごが与えられると。メシヤは赤ちゃんとしてこの世にやって来るわけです。ただしその名前は、赤ちゃんにはふさわしくないような名前です。“不思議な助言者”これは原語では「不思議」という言葉と「助言者」と分けて捉えることが出来ます。イエスの名は「不思議」、また「助言者」。これを英語では“wonderful counselor”と言ったりします。また「力ある神」、この赤ん坊、^{みどりご}嬰兒は「力ある神」だとハッキリ宣言されています。ただの人ではないのです。神なのです。赤子でありながらも「力ある神」。無力な赤子には、ちょっと似つかわしくない名前ということです。そして「永遠の父」。赤ちゃんなのに「永遠の父」と呼ばれるのです。そして「平和の君」と呼ばれます。ここにハッキリと「力ある神」、そして「永遠の父」。これは間違いなく神に対する称号である事は確かです。

そして7節以降にも、このみどりごが王として今よりとこしえまで神の国を治めるといった内容があります。ですからこれはただの人ではないことは確かです。ただの王ではありません。と言いますのは、「とこしえまで」永遠に治める方。人間は必ず権力を手にしても、栄枯盛衰で死んでしまえばそれで終わりです。しかし、この方は「永遠の父」でもありますから、死ぬこともない。永遠にその王権は続くと。ですからここで言う“みどりご”というのは、まさに永遠に国を治める、永遠の王であるということです。これらは全てメシヤに関する預言でありますけれども、これは勿論イエ

スを指すわけです。ですからイエスの素性を綿密に調べれば調べるほどこの方が旧約聖書の預言通りのお方であるということに気付くわけです。

そうなりますと**シエマの朗読**にありました、唯一の神を信じるといった「**神はただおひとりである**」というこの信仰告白と矛盾するのではないかと。父なる神も神様ですし、イエスも神であると。そうすると、「**ただひとり**」ではなくて 2 人になってしまうのではないかというふうな矛盾を感じるかもしれませんが、ここでもう一度**シエマの朗読**に目を移して頂きたいのです。特に**申命記 6 章 4 節**の言葉です。そこに「**神であるお方、主であるお方はただひとりである**」という表現がありますが、この“ひとり”という言葉、これはヘブル語で“**エハッド**”と言いますけれども、この“**エハッド**”という言葉は、「異なる要素が混ざり合っていることを認めつつも、なおもそこに一致があることを強調する言葉。」と言われています。一言で言いますと、“**複合的 1**”という表現があります。例えば具体例で言いますと、卵 1 個のことをユダヤ人は“**エハッド**”と言います。卵は殻と白身と黄身という 3 つに分かれておりますが、これを“**複合的な 1**”。それぞれ殻も 1 個、白身も 1 個、黄身も 1 個なんです、それが 1 つとなって、一体となって 1 つと見る。これを“**エハッド**”というふうに表示します。ですから一体という言葉もこれに当てられるわけなんですけれども、具体的な用例を皆さんと一緒に見て行きたいと思いますが、“**エハッド**”が使われている箇所。**創世記 2:24** を見てください。『**それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。**』と、ここで言う“**一体**”というのが“**エハッド**”という言葉です。そして、これは勿論ですから夫と妻が 1 つとなる。それぞれ個別には男と女という 1 人ずつですけれども、これが夫婦となって一体となることによって、これは“**エハッド**”。まるで 1 つのようにみなされるということです。

他にも**出エジプト記 24:3** も参照しましょう。ここにも“**エハッド**”が使われています。『**そこでモーセは来て、主のことばと、定めをことごとく民に告げた。すると、民はみな声を一つにして答えて言った。「主の仰せられたことは、みな行います。」**』「**民はみな声を一つにした**」とあります。大勢の民、ここでは出エジプトの民ですからおそらく 250 万から 300 万人いたと思われますが、その彼らが一人一人声を持っているんですけれども、その声を 1 つにしたと。これが“**エハッド**”という言葉です。

そしてもう 1 箇所、今度は**士師記 20 章**を開いてみて下さい。この中から何節か読みたいと思いますが、**士師記 20 章 1 節**。『**そこで、ダンからベエル・シェバ、およびギルアデの地に至るイスラエル人はみな、出て来て、その会衆は、こぞってミツパの主のところ集まった。**』新改訳には“**こぞって**”というところに * 印が付いていて、欄外を見て頂くとそこに直訳とありまして『**ひとりの人のように**』とあります。これが“**エハッド**”です。ですから夫婦が 1 人の人のようになると、一体となるという言葉と同じ言葉です。イスラエルの会衆が一体化したと、まるでひとりの人のようにという表現です。この同じ表現がこの士師記の中には繰り返されています。**8 節**にもあります。そして **11 節**にも見られます。同じように直訳では『**ひとりの人のように**』という言葉“**エハッド**”が使われています。ですからこの“**エハッド**”という言葉は多様性の中における一致という概念を常に表す言葉です。これは非常にポピュラーな言葉でよく使われているんです。今挙げたのはほんの一例に過ぎません。

そして、この“**エハッド**”という複合的 1、また多様性における一致という言葉に対しまして、数の上で 1 つ。いわゆる単一を意味する言葉は“**ヤヒッド**”という言葉があります。または“**ヤツヒール**”というふうにも言いますけれども、この“**ヤヒッド**”という言葉は、これが数字の上での 1 です。難しい表現で言えば、不可分の唯一ということです。絶対的 1 という意味があります。用例も参照したいと思いますが**創世記 22 章 2 節**。アブラハムが受けた最大の試練、イサクを生贄として神に捧げるという場面です。『**神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」**』ここで「**あなたの愛しているひとり子**」という言葉があります。このひとり子が“**ヤヒッド**”という言葉です。勿論アブラハムにイシュマエルという息子が既に存在していたんです。にもかかわらず神は、アブラハムにはただひとり子しかいないんだと。すなわちイシュマエルは認知されていません。イシュマエルは肉の行いによる子どもですから、神様は認めていないんです。約束の子だけがひとり子、神の子というふうに言われています。そして、モリヤの地に行きなさいと。そして、モリヤの地というのは後のゴルゴダの丘になります。ですからここではまさに神のひと

りイエスがこの後に経験するところの十字架の贖いの死というものを予表する非常にドラマチックな場面なんですけれども、このように“ひとり子”という言葉。他にも“ひとり子”という言葉が何回か旧約聖書の中に出てきますが、これはみんな“ヤヒッド”という言葉が使われています。あまり沢山は使われていないんですけども、シエマの朗読における申命記6章4節のただひとりの神は、この“ヤヒッド”の神ではありません。“エハッド”の神なんです。すなわち“複合的 1”とされる神。物理的にひとりの神という意味ではないです。一体化した神というのが、実は直訳なんです。

今度は新約聖書を開いて頂きたいんですが、ヨハネの福音書1章に目を移して下さい。ヨハネ1章18節。『いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。』と。ここに“ひとり子の神”という言葉がありますが、原語では「ひとり子であるひとりの神」というのが、原語の直訳であります。不思議な表現です。矛盾した表現であるかもしれません。父も神であり、子も神なんですけども、同時にひとりの神とされています。こういう神様は他にはない。非常にユニークで比類のない唯一のお方ということです。イエスは神のひとり子であり、子なる神でもあると。ですからヨハネ3章16節には『神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。』と。ここでも“ひとり子”という言葉が使われていますが、これもやはり「ひとり子であるひとりの神」という言葉を意味するんですけども、このようにして旧約においても新約においても、父なる神様が神であることはこれは疑いの余地もないんですが、その子であるお方、メシヤとなるお方もまた神であると。すなわち子なる神であるということが実は旧約新約両方において言われているんです。

ですから、改めましてここでシエマの朗読に戻りますけれども、申命記6章4節に「ただひとりである」と言われていますのは、私たちの主はこの“主”というのは新改訳で太字でゴシックの“主”となっていますから“ヤーウエ”です。)、私たちの“ヤーウエ”を意味します。そして私たちの神、この“神”はヘブル語で“エロヒーム”と言います。“ヤーウエ”であり、また“エロヒーム”である方がただひとりであると。そして実はイエスもご自身のことを“ヤーウエ”だと宣言されました。「主、わたしはある、というものである。」と宣言されました。

そして、実はもうひとつ、”主”と呼ばれるお方がいます。それが聖霊です。聖霊なる神。この聖霊も“主、ヤーウエ”と呼ばれています。例えばイザヤ11章2節を見て下さい。1節の方はメシヤ預言です、イエスの預言。そして2節の方に聖霊なる神について触れています。『その上に、主の霊がとどまる。(この“主”というのは太字になっています。ですから“ヤーウエの霊”というふうに訳せます。)それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。』と。そして今度は同じイザヤ61章1節。『神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、』とありますけれども、これはイエスが実際に引用された言葉でもあります。ただ1節の冒頭に“神である主の霊”と。ここで言う“主”というのは太字ではありません。太字でないのは“アドナイ”と言うんですけども、ただ“神”というところに*印が新改訳は付いています。*印の欄外を見て頂くと本来はここは“神”ではなくて“主”太字の主、ヤーウエであるというふうに原語は実はなっているんです。「主である主の霊が」というふうにすると、日本語でちょっと意味不明になってしまうので、敢えてここでは“神”というふうに読み替えているだけです。本来は「主(ヤーウエ)である主(アドナイ)の霊(ルーアハと言いますけれども)が」この中でハッキリと『主の霊はヤーウエである』と原文はなっているわけです。ですから聖霊なる神も“主(ヤーウエ)”というふうに呼ばれているわけです。

以上から父なる神も、子なる神も、聖霊なる神もすべて“ヤーウエ”主なるお方でただひとり“エハッド”であると。すなわち三位一体の神であるということです。これが旧約聖書中から私たちは知り得ます。“三位一体”という事は新約聖書にしか書いてないと思ったら大間違いです。これは旧約聖書にしっかり父、子、聖霊がみな“ヤーウエ”主であって、ただひとり。これは複合的1と言われる三位一体と。三位一体という言葉こそ、用語こそありませんけれども、ただその概念はしっかりと描かれているわけです。

そして今度はこのヤウエだけでなく、“神”という言葉、“エロヒーム”という言葉も着目したいです。この“エロヒーム”という言葉も非常に不思議な言葉で、これは複数形です。複数名詞です。ですから直訳は本来「神々」です。“エロヒーム”は”god”ではなくて”gods”ということです。ですからここでその神々がただひとりと、シエマの朗読では矛盾したことを言っているわけです。神々がただひとりというのは、これは明らかに矛盾というふうに思うかもしれませんが、しかし創世記の冒頭1章1節を見て頂くと『初めに、神が天と地を創造した。』と。その“神”も“エロヒーム”です。複数名詞です。そして“創造した”という言葉が、ヘブル語の動詞で言いますと“バーラー”という語になりますが、この“バーラー”は実は単数形です。複数の神々を、動詞が単数で受けているわけです。これは明らかに神が三位一体なるお方であるということを示唆するわけです。ですから実は聖書の一番冒頭から三位一体の神は登場しています。後から作り上げられた神像だというわけではないのです。この創世記1章には天地創造の記事がありますけれども、他にも“神の霊”という言葉が出てきます。『神の霊が水の上を動いていた。』この“霊”は勿論聖霊なる神を指しています。他にも、神が言葉を発すると万物が創造されてきました。“仰せられた”と言う時に、これは神の言葉によって万物が造られたと。イエスはこの言葉なるお方。『初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。』とヨハネ1章1節にもありますように、ここには言葉として創造に関わった子なる神も登場しております。また『光があれば。』という時に、この光は太陽の光とは別であるということを創世記の学びでも見て参りましたが、ここで言う光は、世の光としてのメシヤを意味しています。ですから三位一体の神は既にこの聖書の冒頭から登場して、天地創造に既に関わっているというわけです。

他にも実は創世記を読み進めて頂くと1章26節というところに『神は(エロヒームは)仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。」』“われわれ”という、これもひとりの神であれば「わたしのかたちとして、わたしに似せて。」と言われたはずですが、“われわれ”というふうに言っていますから、これは複数です。このように三位一体の神が聖書のどこを見ても実は確認出来るわけなんですけれども。以上から主なるお方、ヤウエなるお方、そしてエロヒームと呼ばれる神もすべてこれはただひとり“エハッド”の神と。すなわちこれは複合的1ということで、この3者は三位一体なるお方。イザヤも「聖なる、聖なる、聖なる。」と3回繰り返していますけれども、この3という数字もやはりこの三位一体の神に対応しているわけですから、これが2人だけとか、または3人以上4人とか、そういう数ではなくて、ハッキリと3者と、三位おられてその三位なる神が一体であることを表現しているわけです。ですから本来このシエマの朗読で告白されている唯一神信仰というものは、これは「三位一体の神を信じます。」という実は告白であったわけです。

ここで新約聖書のヤコブ2章19節を開いてみて下さい。『あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。』神が唯一であるという信仰は、これは確かに立派なことなんです。世の中には数々の神々がいる中でただ唯一の神を信じること自体は、これは立派なことなんです。しかし残念ながら、悪霊どももそう信じて身震いしていると。悪霊も唯一神を信じているんです。彼らもある意味正統教理というものを信じているんです。

今度はマルコの福音書を開いて頂きたいです。マルコの福音書5:6~7。悪霊のその信仰を確認したいと思えます。これはレギオンというおびただしい悪霊がひとりの人に憑りついた時の話ですけれども『⁶彼はイエスを遠くから見つけ、駆け寄って来てイエスを拝し、⁷大声で叫んで言った。「いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのですか。神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください。」』凄いですね、ここで悪霊がイエスを拝しとあります。イエスを拝んで、ワーシップしているわけです。すなわち悪霊はイエスを神と認めています。悪霊は自分が礼拝されることを望むんですが、ここではその悪霊がイエスを神と認めているので、もうひれ伏す他はないという状態です。目の前にイエスをしたら、もう悪霊はひれ伏す他はないという状態を迎えているんです。ですから悪霊はただ信じているだけではなくて、実際にイエスを神と認めて拝んでいるわけです。ですから悪霊の言う唯一神信仰、これも父なる神のみを神とするのではなくて、子なる神イエスもまた神と認めている。すなわち悪霊の信仰も実は三位一体の信仰なんです。驚いてはいけません。ただし、悪霊の頭である悪魔はイエスに対してひれ

伏して拝もうとするような場面はありません。悪霊は悪魔の手下ですから身震いしてしまっているわけですが、悪魔はもっとふてぶてしいです。むしろユダの荒野においてはイエスに対して「この世の栄華を与えるからあなたは私にひれ伏して拝みなさい。」と、私を礼拝せよというふうに要求したぐらいです。ですから悪霊も確かにここでイエスは拝んでいるんですけれども、しかし私たちが拝むその礼拝とは勿論意味合いが違います。霊とまことによって礼拝しているわけではないのです。ですから、霊とまことによらない礼拝というものを悪霊が捧げているように、私たちもまた霊とまことによらない礼拝を捧げることが出来るんです。ヨハネ4章において、父なる神は霊とまことによって礼拝する礼拝者、まことの礼拝者を求めているんだと、言われていました。まことの礼拝者ということは、まことでない嘘の礼拝者も沢山いると。その嘘の礼拝者の1人には、勿論この悪霊が数えられるというわけです。ですから、礼拝に参加しながらも、教会のメンバーでありながらも、神はお一人だと信じていながらも、救われていない人がいるというのは真実です。クリスチャンと名乗って礼拝も熱心に参加して、そして信仰告白もして、間違いなくこの人はクリスチャンだと誰もが認めるような人であっても、場合によっては救われていないということもあり得るということです。悪霊がそうであるように、私たちも慎重にそのことを見極めていかなければいけません。と言いますのは、悪霊は、悪魔は光の御使いの姿をとることが出来ます。如何にも輝かしい真っ白なその天使のように振る舞うことが出来ます。ですから、如何にもクリスチャン、これぞまさに模範的なクリスチャンということを装って実は内心は悪魔であると、実はそれは不信者であるというような事は、実は現実であり得るということです。このことも私たちは覚えなくてはなりません。だからこそ今ヨハネの8章におきましては、8章31節には『イエスを信じたユダヤ人たち』というような表現があります。ですから、ただイエスを信じていますと言うだけで、私たちはイコールクリスチャンだというふうに見て、そして気軽に彼らに信頼を置いてはいけないということも教えられるわけです。ユダヤ人たちは当然ヘブル語にも精通していますし、聖書は恐らく私たちよりも旧約に関しては深い理解を持っているわけです。勿論“エハッド”という言葉の意味も十分理解しているはずで、ですから“エハッド”の神を当然信じているはずで、ですから、父と子が一体であるというその神観も本来ならばすんなり受け入れ信じる事が出来たはずで、ですから神の子であるイエスを当然愛するはずで、シエマの朗読でも『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』とされていますから、父を愛するならば子も愛するはずだとイエスはおっしゃったわけです。もし本当に自分たちが父なる神の子どもであると自称するのであれば、神のひとり子イエスのことも愛するはずだと、これがイエスのシエマの朗読を持ち出したこれは応答であったわけです。ヨハネ8章42節にそのことが書いてあります。家族の親しい間柄があるわけですから、まあ『坊主憎けりや袈裟まで憎い』というふうにも言いますが、神様を愛しているならば当然神の子も愛するはずで、ただ、神の子を憎むのであれば当然神も憎むということが同時に裏返しの言い方が出来るわけです。御子を愛していないという事は、父なる神をすなわち愛していないことだというふうになるわけです。

ヨハネ5章39節以降をもう一度復習したいと思います。『³⁹あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。(聖書というのは旧約のことを言っています。)⁴⁰それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。⁴¹わたしは人からの栄誉は受けません。⁴²ただ、わたしはあなたがたを知っています。あなたがたのうちには、神の愛がありません。(、ここでも神の愛がないと言われていました。)⁴³わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。』このように彼らは一生懸命聖書を学んで聖書を知っていますが、しかしそこに神の愛がないのです。

ここでヨハネ8章42節に今度は目を移して頂きたいのですが、『⁴²イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずで、なぜなら、わたしは神から出て来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。』ここにイエスが神であるというそのイエスの神性というものについて、神の性質について述べられているわけなんです、イエスの身分というのはハッキリと父なる神との関係において特別な意味で子どもであるという事が言われています。イエスは神のことを「あなたがたの父」と呼んでも、

「私たちの父」とは呼びません。特別な関係なんです。ヨハネ 20 章 17 節を見て頂ければと思うんですが、復活の主がマグダラのマリヤに最初に現れた時の言葉です。『イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。』』“わたし”と“あなたがた”というふうに分けています。決して“私たちの父”とは呼んでいません。主の祈りの時には“私たちの父”と呼んでいます。あれは『主の祈り』と言うよりは『弟子たちの祈り、神の家族の祈り』ですから、イエスの祈りではないです。ですから明らかに、また厳密にイエスと父なる神との関係と、私たちと父なる神との関係は異なります。イエスは神から出た神です。また神のもとから遣わされたメシヤですが、私たちは神のもとから出ていません。神によって造られたものではありませんけれども、明らかに私たちは被造物です。神にはなり得ません。ただこの被造物が神の子どもとされる特権が与えられているに過ぎません。ですから直接的な関係、父と子の関係を持っているのはイエスだけです。私たちはイエスを通してのみ神様と関係を持つことが出来ます。イエスなしには私たちは神様と直接的な関係を持つことは出来ません。ですから私たちはイエスを通して父なる神様のことを、「私たちの父」と呼ぶことが出来るわけです。このようなイエスの特別な父と子の関係は、イエスだけがただひとりで独白しているのではなくて、父なる神もまたそのことを明らかにしておられます。イエスが洗礼を受けられた時、バプテスマのヨハネから受洗した時に天から「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」と、このように“わたしの愛する子”というふうによりイエスが私生児ではないんだと、不品行による子どもではなくてイエスは私の子どもだと、父なる神が認知しておられるわけです。ですからユダヤ人たちがイエスのことを不品行の子どもと呼ぶのは全く不当であって、神を冒瀆する言葉であるわけです。またヨハネの福音書の中にも“ひとり子”とか“ひとり子の神”というような言葉もありましたけれども、このようにしてイエスはあくまで特別な意味でのひとり子として、父から区別される存在ではありますが、同時に父と等しく神としてあがめられる、神としての本質を持つお方ということが言えます。その父と子の関係、つまり三位一体の関係を理解しようとしないうダヤ人たちは、イエスの言うこの父と子が1つである、また三位一体であるといったこのイエスの神観に対して偶像礼拝者扱いにしているわけです。神はあくまで単一のお方、お一人であって父なる神だけであると。子なる神など存在しないんだと言わなければならないです。キリスト教の異端のエホバの証人も、イエスは神の子だから神ではないんだと主張します。神は唯一エホバだけであると言っていますけれども。しかし福音書はイエスが神の子であるということと、私たち人間が神の子である、または神の子となるということとは注意深く区別している事、このことをエホバの証人たちは見落として混同してしまっています。イエスは父なる神と永遠の昔から存在しておられたひとり子としての神でありますけれども、私たちはこのイエスを受け入れた時に初めて神の子どもとされる特権が与えられます。ですから神の子イエスについては息子を意味する、ギリシャ語で言うところの「ヒュイオス」という言葉が使われているのに対して、私たちがイエスを信じて神の子どもとされる、その“子ども”の原語は「テクナ」という言葉が使われています。いわゆるこれは一般的な小さな子供を指す言葉です。イエスが「テクナ」と呼ばれる事は1度もありません。イエスはいつでも“神の子”と言う時に「息子」というふうに使われています。「ヒュイオス」という言葉です。同時に私たちが「ヒュイオス」というふうには呼ばれることもありません。私たちは神の子どもたちということです。イエスは神の子としては特別な存在、唯一無比の存在であると。他に比べることが出来ない存在です。この父と子の特別な関係、これは父との一体性という言葉でも表現出来ます。

ヨハネの福音書 16 章 15 節も参照したいと思います。『父が持つておられるものはみな、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです。』

そして 17 章 1 節。『イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて、言われた。「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。』

そして 10 章 30～33 節。『³⁰わたしと父とは一つです。』³¹ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。³²イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。』³³ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわ

ざのためにあなたを石打ちにするのではありません。冒流のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。』エホバの証人は、イエスはご自分のことを神と宣言された事は1度もなかったと。クリスチャンたちが勝手に、キリスト教徒たちが勝手にイエスを神として祀り上げたんだというふうに言いますが、しかしここでハッキリイエスは「わたしと父とは一つです。」と。ユダヤ人たちもそのことを聞いて「あなたは人間でありながら、自分を神とする。」と。ユダヤ人たちはハッキリとイエスが神であったと宣言したその言葉を耳にしたんです。ですからもう今石を取り上げて、石を投げつけようとしている。このようにしてイエスと父なる神様、これは父と子、そして三位一体の神であるという父なる神と子なる神との関係であるということ、ハッキリと聖書の中に見てとりました私たちは、イエスが神であることに疑いの余地を全く挟むことは出来ないわけです。

しかしユダヤ人たちは明らかに旧約の中を見ても、“エハッド”という1つの言葉を見ても、神が複合的一体性のあるお方だということを知りながらも、それを読みながらもまた頑なになってしまっている、その事実を認めようとしていない。エホバの証人も同じです。どこを見てもイエスが神であるという事は間違いのない事実なんですが、それを彼らも認めようとしていない。そこに実は悪魔の働き、彼らに嘘偽りを信じこませようとしている悪魔の働き、それを信じる者は当然“悪魔の子ども”と呼ばれるに相応しくなってしまう。そのような霊的な力も確かに働いて、なかなかイエスを神として信じられないようにされているわけです。

ここで今度はマタイの福音書を開いて頂いて、21章33～46節まで。このたとえを読みますとまさに今私たちがヨハネ8章で迎えている場面と重ね合わせることが出来るかと思えます。『³³もう一つのたとえを聞きなさい。ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造って、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。³⁴さて、収穫の時が近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。³⁵すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとり袋だたきに、もうひとり殺し、もうひとり石で打った。³⁶そこでもう一度、前よりもっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。³⁷しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう』と言って、息子を遣わした。³⁸すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』³⁹そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。⁴⁰この場合、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょう。』⁴¹彼らはイエスに言った。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」⁴²イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』⁴³だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。⁴⁴また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。』⁴⁵祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちをさして話しておられることに気づいた。⁴⁶それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。』このたとえが誰に対して語られたのかという事は45節に明らかです。祭司長たちとパリサイ人たちと。すなわちイエスをメシヤと信じない人たちに対して語られた言葉ですが、このたとえの中で農夫たちがこのいわゆる祭司長たち、パリサイ人たちに当たります。そしてしもべを遣わすその主人は父なる神様ですが、そのしもべと呼ばれているのがいわゆる旧約聖書の中に出てくる預言者たちです。預言者たちを遣わしては、彼らはイスラエル人によって殺されたんです。最後には息子であるイエスを父なる神は遣わしました。でもその息子をも殺したんです。勿論彼らはそのような罪を犯せば滅ぼされるわけです。容赦なく殺されます。そして別の農夫たちに貸すと、この別の農夫たちが異邦人である私たちになります。ですからこのたとえ話のような展開を今ヨハネの8章でも迎えているわけです。

そしてヨハネの8:43に今度は目を移して頂きたいと思えます。『あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょうか。それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです。』ユダヤ人たちはこのイエスが話していることが分かりません。ただ先程のマタイの21章のたとえは自分たちの事だと分かって、イエス

を殺そうとしましたが、このヨハネ 8 章の時点でユダヤ人たちは理解していません。なぜ理解出来ないかと言いますと、彼らがイエスの言葉に耳を傾けることが出来ないからだと言われています。ここで“**耳を傾ける**”という言葉が非常に興味深い言葉で、「**アコウオー**」という言葉。これは「聞き従う」、ただ聞くだけではなくて“**従う**”という意味合いも含めた言葉です。ですからただ聞くだけではなくて、従うという事。ですから聞き従って初めて理解出来ることもあるんだということを教えられます。聞き従わないと分からないことがあるということです。ユダヤ人たちは実は最初からイエスに聞き従う気が全くないので、イエスの教えを理解出来ません。いやむしろ理解するつもりがないと言った方が正確かもしれません。実はクリスチャンの中にも、聖書の単純なシンプルな教えがいつまでも理解できずに悶々としている人たちがいます。周囲の人は「これさえ分かればあの人の問題は解決するのに。こんな単純なことがどうして分からないのか。」と思って、そのことを教えてあげたとしても、当の本人は「それは分かっている。でも」というふうに繰り返すわけです。本当に分かっているのかということなのですが、確かに頭では分かっているかもしれませんが、しかし、心では最初からもう聞き従うつもりはないんです。ですから心の中にいつまでも聖書の教えに聞き従いたくないという思いがありますから、簡単に理解出来ることでも理解出来ない。または理解しようとしなないということになります。ですから聞き従うつもりがあれば、実際に理解出来ることは沢山あるんです。でも最初から聞き従うつもりがないので、もう子どもでも理解出来ることが理解出来ない。これが重要なポイントとなります。ユダヤ人たちも旧約の預言ですとか、原語の“**エハッド**”という言葉の意味を提示されれば、当然のことながら三位一体の神を単純に信じる事が出来るわけなんです。しかし彼らは神に聞き従うつもりはさらさらありません。自分たちの好きにしたい、自分たちの好きなように聖書は理解し、解釈したいんだと。ですから彼らは神を愛していないんだと、イエスによって断罪されているんです。クリスチャンでも、単純に理解出来る真理をいつまでも理解しないで拒否し続ける者は、神を愛していない者です。神を愛していないならば、何を愛しているかということ、自分を愛しているんです。自分を愛しているので、単に自分がいちばんかわいいだけなのでなかなか神の言葉に聞き従おうとしない。自分の思いにだけ聞き従いたいのです。自分の思いで、神の思いは全くだこかに行ってしまうているんです。神の思いに聞き従おうとしてないで、自分の思いだけに聞き従おうとするので、聖書の単純な言葉が理解出来ない。それを実践しようとしなないというわけなんです。

ヨハネ 14:15 を参照しましょう。『もしあなたがたがわたしを愛するならば、あなたがたはわたしの戒め（イエスの言葉）を守るはずだ。』と言われています。イエスの言葉を守らない、聞き従わない彼らは、イエスを当然愛していません。そしてイエスを愛さないばかりか父なる神も愛していないということになります。

第一ヨハネ 5 章 3 節も読みます。『神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。』神の命令を守らないということは、神を愛していないということです。「神様の言葉は、この命令は難しい。これは重荷だ。」と言って言い訳にして、それを実践しない人がいます。でもその人は神の言葉が重いと、また難しいと言っている人は、ただ単に神を愛していないだけです。神を愛していれば、神の言葉を決して難しいとは捉えませんが、喜んで従うはずだ。理解出来なくても聞き従います。聞き従った結果、理解出来るという経験を出来るからです。ですから私たちも注意しなければいけません。聖書の言葉は難しすぎると。勿論難しい事は難しいかもしれませんが、ただだからといって聞き従わないという理由にはならないということです。むしろ「理解出来なくてもイエス様のおっしゃることだから、聖書に書いてあることだから私は従おう。」と、神を愛するならばそれが出来ます。でも神を愛していないならば、それが出来ません。「ただただ聖書は難しい。こんな事はとても私には出来ない。いま私は傷ついている。もう自分のことで精一杯である。だからとてもこんな事は出来ません。」と。それは単なる言い訳であって、しかも神を愛していないということの表明でもありますから、これは「私は弱いんだ。私はまだまだ未熟なクリスチャンだ。」というような言い訳でとどまってはいけないわけです。非常に恐ろしいことでもあると。内容は非常に厳しいですけど、イエスはこのことをユダヤ人たちに告げているわけです。

そしてクリスチャンと呼ばれる者の中にも同じ言葉、同じボキャブラリー、聖書用語、神学用語を使っても話が噛み合わない場合がありますけれども、イエスもここで同じようなことを経験しているんだということを覚えて下さい。

同じユダヤ人、同じ旧約聖書を使っているのに、同じヘブル語を使っているのに噛み合わない、話が通じない。それは結局彼らがこの世のものだからです。

ヨハネ 8 章 23 節を見て下さい。『それでイエスは彼らに言われた。「あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません。』イエスは天国のことを、天上のことを話していますが、彼らはこの世のこと、地上のことばかり。すなわち肉的事ばかり考えて、イエスの霊的なことを肉的に捉えようとしています。だからこそ当然噛み合いません。ですから私たちがたとえば同じ“愛”という言葉を使っても、これを肉的に捉えれば当然クリスチャン同士の間では噛み合いません。“赦し”という問題もそうです。これを霊的に捉えるのか、肉的に捉えるのか。これによって同じボキャブラリーを使っているのに全く噛み合わないという事は当然起こり得ます。どちらかが天上のことを話していて、または天上の価値観を持って話していて、どちらかが地上の価値観を持って受け答えているからです。真理であるイエス・キリストはここでハッキリと彼らに真実を告げます。

ヨハネ 8 章 44 節を見て下さい。『あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立つてはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。』彼らのことを悪魔呼ばわりしているんです。真理であるイエスはハッキリとここで彼らの実体、彼らの真実というものを暴露します。あまりに厳しい言葉のように聞こえます。

しかし、ここで箴言 27 章 5～6 節を開いて頂ければと思います。『⁵あからさまに責めるのは、ひそかに愛するのにもまさる。⁶ 憎む者が口づけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。』本当の友だちだけがその友のことを真剣に思うが故に真実を告げるんだということです。たとえそれが厳しい内容であったとしてもです。たとえそれが相手を傷つけることであってもです。本当に愛するならば、友を愛するならば、厳しい言葉を浴びせるようなことになったとしても、結果的に自分を拒否されたとしても、相手のためには口をつぐまないということです。この箴言 27 章 5～6 節はクリスチャンの共同体にも是非必要な言葉です。私たちはお互い傷つけないという思いから、また不和を起こしたくない、差し障りのないようになあなあにしたいというところがどこかにありまして、この言葉をどこか片隅に置いてしまっていますが、イエスはここでまさに箴言 27 章 5～6 節を実践しています。『あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。』と、ズバツとそのものズバリをここで語っています。イエスは「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」と。イエスが真理ですから、真理であるお方は当然嘘偽りは言いません。ハッキリと真実を語るんです。

ここで「あなたがたの父は悪魔である。」と言われてますけれども、この「悪魔」という言葉はギリシャ語で「ディアボロス」と言います。文字通りは「告発者」という意味です。特に正当な理由もなく偽って告発して人々に分裂をもたらす者のことを「ディアボロス」と言います。この「ディアボロス」という用例をいくつか読みたいと思います。第一テモテ 3 章 11 節。『婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。』この「婦人執事」というところに*印が付いていますが、これは「執事の妻」となっています。これはただ単に「グネ(妻)」という言葉が原語ですけれども、この執事の妻は威厳があつて、悪口を言わず、とあります。この「悪口を言う」という言葉が実は「ディアボロス」です。悪口を言うこと、「ディアボロス」。

そして第二テモテ 3 章 3 節。世の終りが非常に困難な時代だということを、パウロは言っていますが、その中の 1 節に『情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、』とありますが、ここで“そしる者”とあります。悪口を言うと同じような言葉ですが“そしる”。これも「ディアボロス」です。

ですから、この「悪口を言う」「そしる」という行為は、実は悪魔的行為だと言ってもいいと思います。私たちは軽率に悪口を言ったり、人をそしることをしますが、これは実は悪魔的行為だと言われると、ドキッとするとおもうんです。この「ディアボロス」という言葉に“ho”という定冠詞、英語で言うところの“the”が付くと、「ザ・ディアボロス」。これが“悪魔”です。この the がないただの「ディアボロス」では、「悪口を言う人」「そしる人たち」というふうに使われます。

ですからこの悪魔こそが、史上最初の告発者ということになります。誰を告発したのかと言うと、神様を告発したんです。創世記 3 章 5 節で悪魔は蛇のかたちをとってエバに対して「神様は本当にそんなことを言ったのですか。神はただあなたが神のようにならないように、目が開いて神のようにならないように、ただ出し惜しみしているだけだ。」と、このように神のことを告発しているんですけども。その他にもこの悪魔「ディアボロス」は、黙示録 12 章 9 節にも出て来ます。『⁹ こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか（*印が付いていて欄外を見て頂くと、ギリシャ語「ディアボロス」反抗者というふうになっています。）、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。（使いどもが悪霊です。）¹⁰ そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの権威が現れた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。』悪魔「ディアボロス」が告発者という意味ですけども、10 節にも「告発者」という言葉があります。こちらの“告発者”という言葉は「カテゴリー」という別の言葉なんですけど、特に「法廷に立つ告発者」という意味があります。ただ悪口を言う、ただそしるという者ではなくて、「法廷に立つ告発者」と。ですから神様の前で日夜私たちのことをありもしないことで嘘偽り、汚しごとを口から吐いて私たちのことを訴えています。これが「ディアボロス」という悪魔です。

イエスはこの“悪魔”という言葉で弟子の 1 人にも使いました。それはイスカリオテのユダです。ヨハネ 6 章 70 節。ここでイエスはイスカリオテのユダのことを“悪魔”と呼びました。『イエスは彼らに答えられた。「わたしがあなたがたの十二人を選んだのではありませんか。しかしそのうちのひとり悪魔です。』ユダのことを悪魔と呼びました。ユダは確かに偽りの口づけをもってイエスを裏切って不当な逮捕に協力しました。

ところが、イエスは愛弟子ペテロのことも実は“サタン”と呼んでいるんです。悪魔ではないですが“サタン”と。“サタン”というのは実は「敵対者」という意味があります。マタイの福音書 16 章 23 節。『しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。』というふうには愛弟子ペテロのことをイエスは“サタン”と呼んだのです。

しかしイエスはこのユダにしても、またペテロにしても深い憐れみをかけて最後まで彼らを愛し続けました。マタイ 26 章 49～50 節をお読みします。『⁴⁹ それで、彼はすぐにイエスに近づき、「先生。お元気で」と言って、口づけした。⁵⁰ イエスは彼に、「友よ。何のために来たのですか」と言われた。そのとき、群衆が来て、イエスに手をかけて捕らえた。』ユダが口づけをもってイエスを裏切りますが、そのユダに対してイエスは「友よ。何のために来たのですか」と、最後の最後までイエスはユダに対して悔い改めのチャンスを与えています。ユダのことを「友よ。」と呼んで、最後まで愛を注ぎ続けます。

そして、今度はルカ福音書 22 章 31～32 節をお読みします。『³¹ シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。³² しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。』

そして、飛んで同じルカの福音書 22 章 60～62 節まで。『⁶⁰ しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません」と言った。それと一しよに、彼がまだ言い終えないうちに、鶏が鳴いた。⁶¹ 主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う」と言われた主のおことばを思い出した。⁶² 彼は、外に出て、激しく泣いた。』ここでペテロはイエスを裏切るということ、これは事前に告げられていましたが、しかしそのままペテロは粹がってはいたんですけどもイエスの言葉通り結局最後にはイエスを裏切るんですけども、しかしそんなペテロに対して「イエスは振り向いて見つめられた」と。このイエスの視線というのは、ペテロを蔑む目、または厳しく断罪する目ではなくて、深くペテロを憐れむ目でした。だからこそペテロは激しく泣いたんです。

ですからイエスはユダのことも、またペテロのことも「悪魔」と呼んだり「サタン」と呼んだりはしましたけれども、最後の最後まで深い憐れみをかけて、そして最後まで愛し続けました。ですからここでイエスがユダヤ人たちを悪魔呼ばわりしたからといって、イエスが彼らを単に断罪して切り捨てているわけではないんです。イエスはユダにも最後まで

チャンスを与えました。ですから彼らにも最後までチャンスを与えるお方です。実際にイエスは何度もパリサイ人たちのことを「まむしの末たち」と呼びました。でも「まむしの末」と呼んで彼らにはまったく救いのチャンスがないというような厳しい言葉も同時に言われましたけれども、そこから実際に救われた者もいたんです。それがニコデモであり、アリマタヤのヨセフであり、またパウロという人でもありました。イスラエル民族だからといって皆自動的に救われるわけではないんです。でもユダヤ人だからといって、またパリサイ人だからといって皆自動的に救われないわけではないということです。今日はここで終わりにしますが、イエスは厳しい言葉をユダヤ人たちに今浴びせながらも、イエスはそんな彼らに最後の最後までチャンスを与え続けたと。勿論残念ながらユダヤにしても、この多くのユダヤ人たちにしても最終的にはイエスを十字架に渡しますが、しかしその中の何人かは実際にこのイエスの愛を受けて、そして救われるという経験をします。私たちがこのイエスの模範に従って、何度言っても分からないという人もいます。何度言っても理解出来ない。しかしそんな時にイエスのとられた姿勢、友に対して確かに厳しい事を言うかもしれないですけども、ただ最後まで愛し続けるということ、愛をもって真理を語るということも、私たちは心に刻まなければなりません。